

《第 508回(2023年12月14日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:8人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4階集会室

『クマのプーさん』 A.A.ミルン/作, 石井 桃子/訳 岩波書店(岩波少年文庫)

12月の読書会では、『クマのプーさん』を読みました。A.A.ミルンの代表作で、幼い男の子クリストファー・ロビンがクマのプーやコブタ、ロバのイーヨーなどの仲間たちと繰り広げる、楽しい物語。石井桃子さんが訳したのを読みしました。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●文章のリズムはいいのに言葉が古いかからか、読みにくかった。子どもたちが何も考えずに読むにはいいと思う。登場人物がみんな個性豊かで、多様性を感じた。微妙にかみ合っていないが、収まるところに収まっている。挿し絵がとてもよい。1985年の発行なので、訳されている言葉が、今使っている言葉なのかと気になるところがあった。

●お父さんであるミルンが、クリストファー・ロビンの部屋で、ぬいぐるみを登場させたお話を語っているところが想像できてよかった。一話一話がクスツと笑える。お茶の会のあとで、コブタとプーが、朝起きたとき一番に何を考えるか話している内容が、のんきな考え方でほのぼのする。最後の、階段を上がっている挿し絵が好き。

●子どもと一章ずつ、ゆっくり読むといい本だと思った。カンガとルー坊の話で「あはア！」を練習するところなど、リズムと言葉の使い方が楽しい。『プーさんとであった日 世界でいちばんゆうめいなクマのほんとうにあったお話』(リンジー・マティック/ぶん, ソフィー・ブラッコール/え, 山口 文生/やく 評論社)も併せて読んで欲しい。まえがきにある、クリストファー・ロビンが動物園でみていたクマのお話。

●哲学的な問答もあり、言葉が面白い。一方で、適正動物や敵がい心など難しい言葉もあった。プーのやせる体操や名前をなくしたときのために、名前をふたつ持っていた話など一つ一つが面白い。“フクロ”となっているのは、原文に合った訳をしているからか。ほのぼのとした日常が描かれている。

●プーがウサギの家から出られなくて一週間待つ間に、クリストファー・ロビンが本を読んであげるが、水分やトイレはどうするかと現実的なことを考えてしまった。風船でハチミツを取りに行くところ、洪水のときのこうもり傘の船も現実的な心配をしてしまう。フクロ、ゾゾなど原文のつづり間違いをうまく訳していると思った。

●動物のクマではなく、クマのぬいぐるみだったことにびっくり。でも、子ども部屋にぬいぐるみが増えて、登場人物がだんだん増えていくのはよくわかる。お父さんが子どもの世界に入り込んで、創作のお話をしてくれるのがすごくいいと思った。ストーリーではなく雰囲気を楽しむお話だと思う。

●プーさんのイメージがアニメで作られてしまっていて、本が楽しめなかった。原作の世界に入り込めず残念。石井さんの訳は読みづらいところもあったが、愛すべきゆったりとした世界が感じられた。クラシックプーと呼ばれる挿し絵が好き。そして、本に地図があることがうれしい。地図を見てそれぞれのシーンを思い浮かべることができた。

●難しい言い回しもあるが、子どもは言葉が分からなくても、全体の流れからなんとなく理解して読むことができるのではないかと。ゾゾをつかまえる話の“わなわなしい”など、言葉あそびも楽しかった。石井さんの文章からも楽しさや愛おしさが伝わってきた。大人が読んで楽しいが、子どもたちにも、このお話のおおらかさを味わって欲しい。

次回 1月11日(木)10:00~11:30 オーテピア 4階集会室

□『ナヌークの贈りもの』 星野 道夫/著 小学館

※申込み・参加費は不要です。